令和3年12月20日　北海道新聞　朝刊
17面　本学関連記事

コロナ禍で初めて行われた大学入学共通テスト＝2021年1月16日、道教大札幌校（金本麟子撮影）

大学入試 共通テスト難化か

「首都圏」「難関」に志望者回帰

1月15、16の両日行われる大学入学共通テストまで1カ月を切り、年明けから大学受験シーズンが本格化する。大手予備校の多くは、初回となった2021年の共通テストは想定よりも比較的平易だったとして、「2回目はより難しくなる」との見方だ。コロナ禍で迎える国公立大、私立大の志望動向や本番前の効果的な勉強法などを、河合塾札幌校の北山健一校舎長に聞いた。

大学入試センター試験の後継として、21年に始まった大学入学共通テストでは、出題や得点などを巡って混乱が予想された。加えてコロナ感染が拡大し、道内では先行きが見通せないことを理由に、第1志望より確実に合格を狙える大学への変更や、首都圏を避ける受験生が増えた。

今回は感染状況が落ち着いていることから、国公立、私立を問わず敬遠していた首都圏の大学人気が戻り、難関大への志望者も増加。「安定」志向から「攻め」の姿勢に変わっている。

河合塾が10月に行った模擬試験データによると、北大法学部の志望者は、前年の試験と比べて31%増に。道外を中心に増え、北大は工学部も同12%増、理学部も後期日程で同12%増などとなった。札幌医科大や旭川医科大も前年の反動増の傾向がみられ、北山さんは「景気や社会情勢が不安定だと、理系学部や資格取得を目指せる学部など就職を見据えた大学選びの傾向が強まる」と分析する。

模試データに基づく道内大法学部の志望者は、前年の試験と比べて31%増に。人気が集まり、従来型の一般方式は全体的に志望者が減少。一般方式の文系は前年の試験と比べ、系統別では「法・政治」が94%、「文・人文」が92%、「社会・国際」が91%などと一前年割れ」になっている。

一方、これまでは人気が高かった国際関係分野の学部は、コロナ禍で海外留学が困難になった影響で全般的に伸び悩んだ。ただし、オンラインによる国際交流や海外大学のプログラム履修などの取り組みは進んでおり、「今後はさらに回復するはずで、過度に敬遠しなくてもよいのでは」とみる。

大学入学共通テストに関し、運営する大学入試センター（東京）は、全体の平均点を「5割程度」と見ていたが、初回は6割を超える科目もあった。北山さんは「2回目以降は初回よりも簡単になることは考えにくく、平均点を5割台に近づけようと難しくなるのでは」とみる。

初回より平均点が下がれば、各大学の合格ラインも下がることになる。北山さんは「目標としていた点数に届かなくても諦めず、冷静に状況をみて出願先を決めてほしい」と話す。

志望先を選ぶに当たっては、コロナ禍で入試方式に変更がないか注意が必要だ。感染対策で面接オンラインにしたり、試験時間を短縮したりする私も少なくなく、「大学のホームページで小まめに確認を」と呼び掛ける。

想定される入試・志望動向

- コロナ感染落ち着き、「安定」志向から「攻め」の姿勢に
- 首都圏の大学、難関大への人気が回帰
- 全体の志願者は入学定員を下回る「全入」時代で難争緩和
- 共通テストの平均点は初回よりも下がる可能性
- 共通テストで思うように得点できなくても、全体の状況を見て出願する

本番前の勉強法や注意点

- 足りない部分を補い、復習する「固め直し」に重点を
- 過去の入試問題を解くだけではなく、融合・発展問題にも取り組む
- 睡眠時間を確保し、朝食を取るなど生活リズムを整え、本番に備える
- コロナ禍で入試方式に変更も。大学HPなどで必ず確認を

常音・樽商・北見工 志望動向

経営統合「効果みえず」

来年4月に経営統合する帯広畜産大、小樽商科大、北見工業大の志望動向は現段階で、例年と大きな変化は見られない。北山さんは「3大学を目指しているのに、統合自体を知らない受験生が多い。仮に3大学で一括入試を行うなどすれば、注目を集めたかもしれないが、模試データを見る限り、統合効果はうかがえない」とみる。

理由については「3大学の一つに入った後、他の2大学の講義をどれだけ学べるのかなどが受験生に伝わっていない」と話す。3大学は経営統合方針の最終まとめを7月に発表。3大学の学生が相互に履修できる文理融合型の教育プログラムなどを開発中だ。時間的な制約があったことは否めないが、樽商大を志望する小樽市内の高校3年の女子生徒は、募集要項に記載された文理融合科目の一覧を見て、「気になる科目もある。入学できたら履修してみたい」と期待を込めていた。

復習が効果的

足りない部分「固め直し」

共通テストや国公立大の2次試験、私大入試に共通する勉強法として、北山さんは「足りない部分を固め直す学習」を挙げる。間違えた問題だけではなく、たまたま正解したり、迷って解いたりした問題は、参考書と行き来して復習することが必要と指摘する。その上で、「志望大学の過去の入試問題を繰り返し解くだけでは効果を得られない。過去問は傾向などを探る材料に過ぎず、何ができ、何が足りないかを見つけることが大事」と強調する。

授業や教科書では触れているが、「多くの生徒は深くやっていない問題」を解くことも重要という。数学なら公式を二つ以上使う融合・発展問題、歴史なら「〇〇の変」の際、どのような政治が行われていたか」などを理解することで、得点力がアップする。北山さんは「分かることが増えれば、解ける問題は劇的に増える。受験生は最後の1カ月が急激に伸びる」と言い切る。

受験科目の勉強が追い付いていない人は、どうすればいいか。「得意科目に取り組んでも伸びしろは少ない。地歴公民や古文など基礎を押さえれば、今からでも点数につながる科目はある。だからといって漫然と問題を解くのではなく、教科書や参考書に戻る基本が大切」と助言する。

体調管理も必須だ。本番が迫ると不安に駆られ、深夜や明け方まで根を詰めてしまいがちだが、「睡眠時間を削って勉強するのはやめるべきだ」と訴える。冬休みのうちから朝起き、朝食をとって頭据えて起床し、朝食をとって頭が働くよう生活リズムを整えるのが鉄則としている。

先生十色

拓北養護学校教諭
増田望（のぞむ）さん（52）

道と北東北3県（青森、岩手、秋田）の教員人事交流事業で、2019年4月から2年間、岩手県立釜石祥雲（しょううん）支援学校（釜石市）の高等部に勤務した。障害のある生徒たちが地元の酒蔵と共に、地酒のラベル作りに携わるなど、地域と密接に関わる学習が印象深かった。「自分たちも地域とのつながりをもっと強めていきたい」と意気込む。

釜石市の文化を紹介する増田望さん

地域とのつながり強めたい

釜石では地元企業での就業体験や技能発表を通じ、就労につなげる取り組みが盛んに行われていた。企業からの称賛や助言は、生徒の自己肯定感を高めるきっかけにもなり、「学校の枠にとらわれず、新学習指導要領が掲げる『社会に開かれた教育課程』に合致していると感じた」と振り返る。

岩手県奥州市出身。東京都内の私立大を卒業した後、民間企業の勤務を経て28歳の時、道の特別支援学校教諭となった。札幌市北区の拓北養護学校では、小学部3年の学年主任を務める。「子どもたちと気持ちが通じていく感覚にやりがいを感じる」と話す。

釜石から戻って約9カ月。コロナ禍で地域と交流することは難しいが、授業で盛岡市の祭り「さんさ踊り」を紹介するなど多様な文化があることを伝えている。「多様性を学ぶことで、『違いがあっていい』という気持ちを育み、自分自身を認めることにつながれば」と願う。

東日本大震災で多くの住民が犠牲となった釜石市鵜住居地区を訪れた時、一緒に行った同僚から、自分も震災で親族を亡くした」と打ち明けられた。「遺族の悲しみはずっと変わらない。これからは防災教育にも力を入れていきたい」（田口博久）

令和3年12月19日　北海道新聞　朝刊
3面　本学研究員　高野宏康氏　掲載

日曜に想う

論説委員
沢村 亙

デモクラシーを育てる言葉とは

音を、ためる。ことばが蘇る。

明治の世に西洋から日本に伝わった蓄音機は、「蘇言機」などとも呼ばれていた。実際、人びとの心を魅了したのは音曲ばかりとは限らない。

皇学館大学で日本近現代史を教える長谷川怜さんに、コレクションのSPレコードを年代物の手巻き蓄音機で聴かせていただいた。

漆黒の大箱のふたを開け、ゼンマイのハンドルを回す。鈍く銀色に光るS字のアームを円盤にのせると、歯切れよい弁舌が聞こえてきた。

「清き一票は清き仲間に入れよ、ということにいたしたい」

語りかけるような声の主は、「憲政の神様」と呼ばれ、普通選挙実現にも取り組んだ政治家の尾崎行雄である。「自身への支持よりも、『正しく選べ』と説く尾崎の演説は、今も心に響くものがあります」と長谷川さんはいう。

尾崎や大隈重信をはじめ、少なからぬ政治家が自身の演説をレコードに吹き込んだ。陣営の演説会で流し、市販もされた。まだラジオがなかった時代、目の前にいない人物の肉声を聞くのはいかに鮮烈な体験であったことだろう。

大正デモクラシーの息吹が社会に行き渡り、多数に届く言葉を通じて共感を得ることこそが政治の要諦であると政治家が悟る一翼を、蓄音機は担った。

自由民権の思想が花開いた明治初期の時代に、話はさらにさかのぼる。

言葉をどう届けるか。その模索が、書き言葉においてもあったことを、高知市の自由民権記念館で開催中の企画展「言葉をつくった時代」は教えてくれる。

識字格差が大きかった時代、政治論説が中心で漢文調や文語体で書かれた大新聞と、事件やゴシップをふりがな付きの平易な文体でおもしろおかしく描く小新聞とに二分されていた。

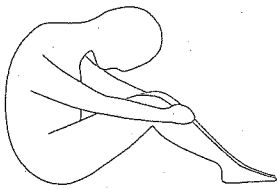
民権家の多くは士族出身の知識層だった。彼らが教わってきた漢文調の文章表現では庶民の心に届かない。

橋渡しをする動きが生まれた。自由党や立憲改進党が小新聞や絵入り新聞の発行を始める、小新聞の「いろは新聞」が「誰もが政治思想を持たねばならない時代が来た」として政治ニュースの掲載を始める――などである。

高知出身の宮崎夢柳らの書く政治小説が人気を博し、さらに書き言葉を話し言葉に近づける文学の「言文一致運動」が勃興する。「自由思想を広く伝えられる言葉を模索した民権家、感じるまま思うままに表現できる言葉を求めた文学者。いま私たちが使っている言葉は、二つの自由を求める動きから生み出されたように思われます」。記念館の学芸員、汲田美砂さんの見立てである。

民衆に寄り添った言葉で価値観の共有を試みたのが民権期の新聞だとすれば、言葉で訴えかけることで合意の形成を目指したのが演説だった。

当時の政治演説にくわしい小樽商科大研究員、高野宏康さんによると、明治初期から全国で演説会が盛んに催され、演説技法のハウツー本も売られた。デモクラシーと言葉が互いに影響を及ぼしながら進化した時代がかつて、あった。



「潜る」　絵・皆川明

そして21世紀。音声や文字が、ちまたにあふれている。

しかし、政治と若者をつなぐ広告会社「POTETO Media」社長で自身も20代の古井康介さんは、政治の言葉が若者に「届いていない」と案じる。

なぜ、届かないのか？　「今の若い世代は、身の回りの生活空間をまず良くしてほしいと欲している。身の丈を超える大きな主張や、前のめりの批判だけでは言葉が心に刺さらないのです」

そろそろ、届く言葉のあたらしいかたちを探求すべき時かも知れない。

冒頭の蓄音機に話を戻そう。長谷川さんに太平洋戦争中に売り出された珍しいレコードもかけていただいた。米軍機の爆音を収録したもので、国民の「防空意識」を高める目的でつくられたという。

蓄音機にしても、SNSにしても、はやりの技術を用いて流布される情報は時代を映す。その「影」の部分をも。